

TORIDE 団地タイムズ



シンポジウムの冒頭では、映像で宿泊の様子を振り返った

「団地に泊まる。」という体験 サンセルフホテル



2012年9月に取手井野団地（取手市）で始まった「サンセルフホテル」。
取手市外のメディアからも注目をあつめるこの「サンセルフホテル」現象を読み解くシンポジウムが
2014年2月28日に東京都千代田区のアートセンター「アーツ千代田」で行われた。

シンポジウム 「サンセルフホテルとは何なのか」開催

サンセルフホテルは事件だ！

何がおこっているのか

「サンセルフホテルとは何なのか？」
—アート、建築、演劇、環境、コミュニティデザインから読み解く。このシンポジウムは、サンセルフホテルの様子をはじめから見守ってきた、建築家である馬場正尊（ばば・まさたか）さんのこんな疑問からはじまった。「何がおこっているのかわからない。ただなめことが起きていることだけはわかるのですが、ちゃんとかめない。さらに、若干感動している。今日はそれを知りませんでした。」

サンセルフホテルは、ホテルマンがみんなで一緒に考えて、楽しそうにつくりあげているプロジェクト。一方で団地の空き部屋を使う、電気を自分で集めて使う、というところには、なかなかメッセージが秘められているような。そんなモヤモヤの塊のような活動を掘り下げるこのイベントには80人をこえる参加者が集まった。

参加者は行政職員もいれば、都市計画の研究者も、アーティストや建築家、そしてその道を志す若者たちも。中には取手からやってきたホテルマンの姿も見られた。

ファシリテーターを務めるのは、取手アートプロジェクト実施副部長で

地域のエピソードをスタートに

団地の壁を所有する？

その作品の取っ掛かりになればと思っ
ています。

本やエンターテインメント等はページ
をめくればめくっただけのものがたりが
展開していきますが、ここではある象
徴的な1場面を示しその前後には見る
人の想像の余地をあえて残すようにし
ています。

—その向き合い方のヒントは？
考えていたのは、絵を所有すること
と同じように、個人が壁面を所有するこ
とができるのではないかとという素朴な
疑問でした。個人が絵を所有する、庭
を所有するというのは、みな想像で
きることと思いますが、公共の壁面を所有
するというのは、「普通ありえない」。



そのありえない「壁面を所有する」つ
てことをやっていたんです。それ
が、『IN MY GARDEN』のMY
の意味です。団地の住民は、ペランダ
から壁面が見える。窓で切り取られた
向かいの壁面＝壁面は、みんなが所有
できる、すなわち借景なんです。

—と上原さんは言う。今までも所有
していたけれど、そこに意味や価値は
空白だった。その風景の要素としての
壁にものごたえを与え、そして場所が
作られていく。それが戸頭の人々の心
の中に新しい地図を描いていく。
【中面2ページより作品紹介】

上原 耕生 うえはら こうお

現代美術家。1982年沖縄生まれ。2010年東京芸術大学大学院 美術研究科先端芸術表現専攻修了。美術館やギャラリーといった既存の展示空間や手法にとられず、外壁や空き地等の日常空間を使い、空間そのものを作品化する表現を行う。壁画シリーズの他にペインティングと映像の光を掛け合わせた「white painting シリーズ」等がある。2011年より茨城県大子町にある精神科病院にて造形教室の専任スタッフとしても活動中。

「IN MY GARDEN」は、
UR都市機構による団地の外壁修繕に際して始動した
団地外壁をアート作品化するプロジェクトです。
2013年6月、戸頭団地やその周辺にお住まいの方々を対象に
「戸頭団地にまつわるエピソード」を集めることからスタートしました。
寄せられた約90通のエピソードから
アーティスト・上原耕生が着想を得て、
絵本の頁をめくるように団地の壁にアートを展開しています。

what's IN MY GARDEN

「アートのある団地」の新聞

この「TORIDE団地タイムズ」は、取手を拠点に活動する「取手アートプロジェクト（TAP）」が2012年よりスタートした「アートのある団地」計画の「ダンチ・イノベーターズ（DIT）」というチームの活動の一つです。取手井野団地と戸頭団地で行っている活動をレポートしていきます。

TORIDE 団地タイムズ



IN MY GARDENのシンボリックな存在「Every morning」

戸頭



「サンセルフホテル井野団地」は、
アーティスト・北澤潤が発案し、
取手アートプロジェクト（TAP）と「ホテルマン」と呼ばれる
取手井野団地の住民有志を中心としたメンバーが
取り組んでいるプロジェクト。
井野団地の夜空と空き部屋にお客様とホテルマンが
一緒になって「太陽」と「ホテル」をつくりあげる体験をとおして
日常生活の原点に思いを馳せることを目的としています。

what's SUN SELF HOTEL

ウェブサイト www.sunselfhotel.com

北澤潤 きたざわ じゅん

現代美術家／北澤潤八雲事務所代表。国内外各地の地域コミュニティと協働しながら、人びとの生活に寄り添うアートプロジェクトを企画・運営している。代表的なプロジェクトに、不要な家具を収集し物々交換することで変化する「居間」をつくる（リビングルーム）や、授業が終わった放課後にオリジナルの「学校」を開校する〈放課後の学校クラブ〉、仮設住宅のなかに「手づくりの町」をつくる〈マイタウンマーケット〉などがある。



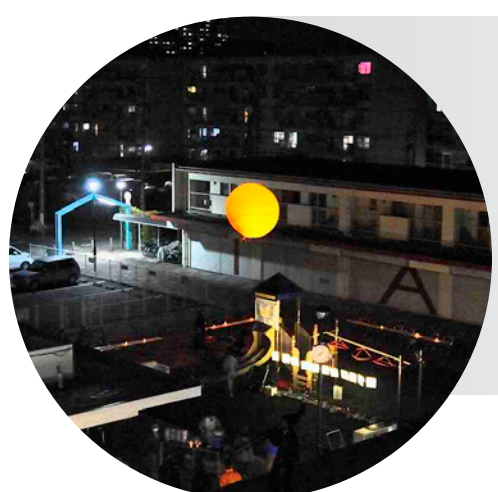
の見送りシーン。
ぎゅっと凝縮された一泊二日から、
会場へと意識が戻る。

制度を超えた出来事

映像を見た後の口火を切ったのは馬場さん。
「団地をホテルにするというプロジェクトなんです。建築の目線からいうと用途変更ということになるわけです。普通に考えたら、大変な手続きが必要。けれど、『これはアートです』という伝家の宝刀をきることによって、突破しているわけですね。」

第1回宿泊後、イベントの様子を知った方から「法律違反じゃないのか、営業許可はとっているのか」などの指摘が、管轄の保健所を経由して取手市に入った。その指摘を受けて、第2回宿泊を迎えるために、ただのアートプロジェクトだったサンセルフホテルは、他の一般的な宿泊施設と同様に保健所や消防、警察での手続きを経ることが必要となった。

「通報があったら動かさるを得ない行政の立場であるとか、それ自体を浮かび上がらせているというのが楽しかった。数々の問題提起をし、さざ波を立てているというところを目的にしたいんです。」【中面7ページに続く】



井野



IN MY GARDEN

Episode
紹介1

ここだけのはなし

夕方からの楽しみは、戸頭駅前の居酒屋「温知」で馴染客同士の談笑と、マスターの手料理とママさんの人柄が相まって、戸頭界隈の夜が尚いっそう楽しいひと時になっております。

70才 男性

上原『「ここだけの話だけれど…」と話す、その内容が誰かの内緒話の1場面としても解釈出来るだろうし、戸頭という場所として、特有の「ここ」のニュアンスも含ませています。苦勞して登っていく居酒屋＝路地裏っぽい居酒屋へ、上司に隠れ家へつれていってもらう様なイメージのワンシーンです。誘われて、大人の仲間入りすることへのあこがれのようなものが僕の中にあったのかもしれない。』



こんなところからも「At home」

<上部写真左> 日常の風景にとけ込む「Memory」(左)と「Every morning」(中央奥) / <写真右> 団地の本棚「Book climbing」



IN MY GARDEN

Episode
紹介2

非日常口

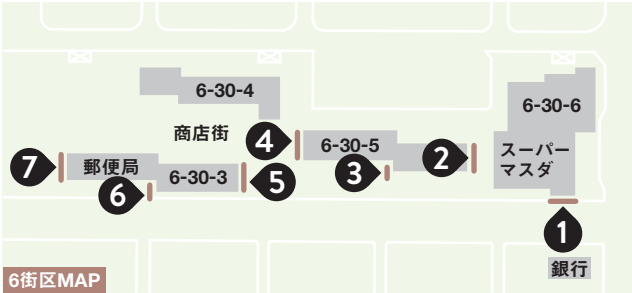
私はこの戸頭団地に住むようになりまして、2年と3ヶ月になろうとしております。福島原発から20km圏内に自宅がありましたので、こちらの親戚をたよって避難してきました。いつまでも親戚にたよってはられないので住むところをさがしたところ、団地でも2階のお部屋が空いていたのは、ただ一カ所、戸頭団地だったのです。

戸頭団地在住3年目 女性

上原『この団地は3.11の被災者の受け入れ場所としても実際に機能してきました。人を温かく受け入れる戸頭団地のイメージと、もうひとつは日常から飛躍する「入り口」としてのアート(機能)をコンセプトとして掛けています。』

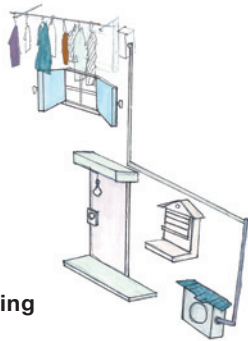


樹木の向こうに見え隠れする[Cafe terrace] (写真左後方)



戸頭団地では、今号で紹介した6街区7面と、4街区5面の計12面がアート化されている。ぜひどの作品がどこにあるのか意識しながら、団地の中を歩いてみてほしい。

1. Every morning / 2. ここだけのななし / 3. Memory
4. At home / 5. Cafe terrace / 6. 非日常口 / 7. Book climbing



戸頭団地の壁に現れた計12面の作品群。 散策中に、お気に入りを見つけてくださいね。

TORIDE 団地タイムズ Vol.2

主催・発行：取手アートプロジェクト (TAP) 実行委員会
企画・編集：ダンチ・イノベーターズ・チーム (DIT)
編集長：新堀学
執筆・取材：新堀学、青木公隆、中嶋希実
デザイン：濱祐斗 (YUTO HAMA DESIGN)
写真：伊藤友二、DIT
協賛：UR 都市機構
助成：財団法人 自治総合センター 平成 26 年度地域の芸術環境づくり助成事業
協力：戸頭団地自治会／戸頭町会／取手井野団地自治会
独立行政法人 都市再生機構東日本賃貸住宅本部
株式会社 OpenA／関東鉄道株式会社
お問い合わせ：
取手アートプロジェクト実施本部
〒302-0024 茨城県取手市新町 2-5-5 2F
TEL・FAX：0297-72-0177 (電話は火・金 13:00～17:00)
Email：tap-info@toride-ap.gr.jp
Twitter：@toride_ap
WEB：www.toride-ap.gr.jp
本紙をご覧になってのご意見・ご感想などぜひお聞かせください。

TAPについて
取手アートプロジェクト (TAP=Toride Art Project) は、1999 年より市民と取手市、東京芸術大学の三者が共同でおこなっているアートプロジェクトです。若いアーティストたちの創作発表活動を支援し、市民のみなさんに広く芸術とふれあう機会を提供することで、取手が文化都市として発展していくことを目指して活動を続けています。

取手井野団地
所在地：茨城県取手市井野団地
アクセス：JR 常磐線「取手」駅 徒歩 15 分 またはバス 5 分
入居開始：1969 年 6 月～1969 年 9 月 [総戸数：2,166 戸]
家賃：38,100 円～49,100 円

取手井野第二団地
所在地：茨城県取手市井野
アクセス：JR 常磐線「取手」駅 徒歩 15 分
入居開始：1991 年 3 月 [総戸数：110 戸]
家賃：65,900 円～88,700 円

戸頭団地
所在地：茨城県取手市戸頭
アクセス：関東鉄道常総線「戸頭」駅 徒歩 3～12 分
入居開始：1975 年 4 月～1992 年 8 月 [総戸数：1,187 戸]
家賃：42,900 円～74,100 円

団地タイムズ記者、募集中！
「アートのある団地」プロジェクトに記者（無償ボランティア）として参加しませんか。興味のある方ならどなたでも。

ダンチ・イノベーターズ！プロジェクトについて
公募で選出された「新しいダンチをつくるプランを本気で実現していく」ダンチ・イノベーターズ・チーム (DIT)。立場も職業も様々なメンバーがソフトからハードまで「ダンチ」を面白く変えていくプランを検討中。日本全国 290 万戸を数える団地への社会提案を、取手から！



戸頭・井戸端会議

アートがイメージさせる 未来の戸頭

実際に作品が姿を見せる前、落ち着いた時間の流れる空間・ハコカフェに集まったみなさんが、一足先にプランをこっそり覗いていた。参加してくれたのは、戸頭町会の大関さんと佐藤さん、戸頭に住む大久保さん、ハコカフェ店主の飯田さん。なごやかなプチ発表会となった。

〔2013 年 10 月 29 日〕

「90 通もエピソードが届いたのか！」と驚いたのは戸頭町会長の大関さん。「戸頭の活性化を本当に祈っている。元氣よく、若い人からお年寄りまで集まれる環境にアートの力を借りてなあってほしい。」と期待を寄せる。作品のプランを見て、「想像すると本当に楽しみ。このアートをを見て、素敵だなど戸頭に降りてくれる人がいたら嬉しい。」と楽しそうに語ってくださった。

戸頭に団地ができた頃からお住まいの戸頭町会副会長の佐藤さん。「当時は、飲み屋がたくさんあった。商店街も活気があり、売り場が足りなくて特設場所をつくったぐらいだった。」作品のプランや位置をじっくりと見つめながら、「ここは集まれるな。ここはアートをしながらゆつくりとできる。」と作品の使い方をもう考え始めていた。

「ハコカフェ」オーナーの飯田さんは、「戸頭に住み始めて 5 年ほどだけど、引っ越しの挨拶に行った先の方々から、子どもの声が団地に聞こえるのが一番嬉しい」と言われたことが印象的だった。」と話す。戸頭の情報集積場になっているハコカフェでは、「若い人をもっと応援していきたい」と考えている。作品のプランを見て、「電車からも見えるんですね。非常に魅力的。全部の団地でやってほしい。」と笑顔。

戸頭に住む大久保陽子さんは、作品のプランを見ると「すごい！！楽しみ。立体になつてると、笑いながら楽しそうに見ている。」

「この作品だけで終わらないでほしい。常にこのアートの下で何か動いてほしい。」と飯田さんが今後の展開に期待を寄せると、「この壁の下でイベントがあってほしいな。朝市と夕市でつかってもいいよね」と大関さんもイメージをふくらませる。

この作品をきっかけとして戸頭に人が集まり、活気のある将来の戸頭の姿が、頭の中に思い描かれた楽しい時間だった。

hako café (ハコカフェ)

住所：取手市戸頭 3-2-1
電話：0297-79-1151
営業時間：11:00～21:00 (金・土は 23:00 まで)
ランチは 15:00 まで
定休日：毎週月曜日・第 3 日曜日
備考：駐車場あり



茨城県内でのお部屋探しなら 礼金不要・仲介手数料不要・更新料不要・保証人不要 4つのメリットが嬉しいUR賃貸住宅におまかせ！

人は、ふれあって育つ。
UR賃貸住宅

茨城県内に 16 物件！



取手井野団地室内写真一例
(家具・調度品は実際には含まれません。)

URお友達紹介制度

5,000 円の QUO カードを
プレゼント！

UR 賃貸住宅にお住まいの方が、UR 賃貸住宅をお友達に紹介され、新規にご契約された場合が対象となります。
※一部対象外となる場合があります。

近居促進制度

新しくご入居いただく世帯の家賃を
5 年間 5%割引！(一部物件対象)

子育て・高齢者世帯等が、同一又は隣接 (2 km 圏内) する UR 賃貸住宅に近居することとなった場合が対象となります。

UR賃貸ショップつくば駅前
茨城県つくば市吾妻 1-5-4 MOG2階
TEL.029-855-4045
営業時間：10:00～18:00(定休日水)
※近隣物件の同行案内は 15:00 までです。



つくばエクスプレスつくば駅A5出口徒歩1分

UR賃貸ショップ取手駅前
茨城県取手市取手 3-4-8 海方ビル4階
TEL.0297-77-5600
営業時間：10:00～18:00(定休日水)
※近隣物件の同行案内は 15:00 までです。



JR線ほか「取手」駅東口徒歩1分

▼詳しくは今すぐアクセス！

UR賃貸 茨城

検索

街に、ルネッサンス

UR 都市機構

独立行政法人 都市再生機構
東日本賃貸住宅本部 千葉エリア経営部

〒261-8501 千葉県千葉市美浜区中瀬 1-3
幕張テクノガーデンD棟20階 TEL.043-296-7294

※当機構と「申込み代行業者」とは、一切関係ありませんので、ご注意ください。

でもどこが、北澤潤とサインしてある作品なのかと言われると、よくわからない。アート
熊倉純子 くまくら・すみこ
東京芸術大学音楽環境創造科教授
取手アートプロジェクト実施本部長



でもどこが、北澤潤とサインしてある作品なのかと言われると、よくわからない。それはあえて存在しないのかもしれない。

すべての人の中にある創造性を

パネリストからのコメントが出揃ったところで、会場の客席で話を聞いていた、アーティストの北澤さんにマイクが渡る。

「サンセルフホテルが持っているものが、領域横断的にいるる言葉に変わっていくというのが、僕にとっては嬉しい。プラス、しめしめと思っています。」

パネリストのから出た言葉の数々は、すべてがサンセルフホテルを構成する要素だという。

「熊倉さんが言ってくれた、妄想の部分についての僕はすごい信じていて。いろんな人が関わってくれて一緒に妄想をしていく。妄想だったり、つ

くつてみよとする気持ちだったりとかは非常に根源的で、それがいいものにも始まらないのな、って思います。作品をつくるっていうよりも、妄想が起る一つの時空というか。場所をつくることによって、妄想が引き出され、いろんな人がある種アーティストになりながら、こういう未分化の現象を生んでいくと自分が、逆説的に僕のアーティストとしての仕事になっている。」

みなさんからの意見をいただいたところで、馬場さん。

「熊倉さんが言ったアートの絶対的な無用性、北澤潤が言った根源性というところ、なにかの親和性があるような気がしてしかたがない。あの一見無駄な、太陽を上げるという行為に、心震わされちゃうんだってことはわかってきた。」

あの一眼無駄な、太陽を上げるという行為に、心震わされちゃうんだってことはわかってきた。

建築
Panelist
馬場正尊 ばば・まさたか
建築家 / Open A 代表
東北芸術工科大学准教授
ダンチ・インベーターズ！ディレクター



「宿泊に使うのは量とれたつくりたての電気ですね。魚を自分で釣って、それが夕食にできる、みたいな感じのかな。その距離感と、自分でやるっていうことの意味は、実は3・11なんですよ。」

長島さんからは、太下さんのお話を受けてのコメント。

「宿泊に使うのは量とれたつくりたての電気ですね。魚を自分で釣って、それが夕食にできる、みたいな感じのかな。その距離感と、自分でやるっていうことの意味は、実は3・11なんですよ。」

「ほんとに、神様になったんです。まるで皇室の方がいらしたみたにだ。ほんとに次から次へともてなをしていただいて。一回太陽の風船が割れたとか、起きたトラブルなんかも含めて、とても楽しかったです。」

最後に馬場さんからアーティストの作家性・主体性について疑問が問いかれた。それに応答したのは熊倉。

「作家性がないわけじゃない。ゼロじゃないとは思いますが、そんなにこだわらなくてもいいじゃないの、とも思っています。創造性はすべての人の中にある、そういう風にちょっと変わってきてるのかなっていう気もするんです。」

さらに熱の高まりそうな議論の途中で、時間切れとなり、シンポジウムは終了。サンセルフホテルを巡るみなさんのモヤモヤは、少しでも晴れたかどうか。ますますわからなくなってきた気さえる、様々な視点からの「サンセルフホテル」という現象を解体するこの試み。新たな意味が重なって見えた今回のシンポジウムを通して、サンセルフホテルは今後どんな形に育っていくのだろうか。

サンセルフホテルはアートなのか、建築なのか

サンセルフホテルは、私たちにあらゆる「問い」を優しく突きつけてくる。

夜空の「太陽」になぜ心震えるのか、ソーラーワゴンでの電気採集はエネルギーの新しい捕まえ方が、団地をホテルに変えることが難しい社会制度は何のためなのか、これは祭りではないのか。

シンポジウムで言葉になったこれらの「問い」とスケールは違えど、現場での「問い」も不思議だ。

「今夜、太陽があがるらしいけど、見に行く?」「行きたい!」「意味分かんない。」こんなやりとりも井野団地では起こっている気がするし、ホテルマンの会議だって、時に悩ましい。すべての電気を賄うなら風呂はどうする? 宿泊料は一体いくらかいい? 今回のお客さん、お肉が好きみたいけどメニュー変える? 当日曇りの予報だけどうする!?

何をもってして「サンセルフホテル」なのか。とにかく、サンセルフホテルは大小さまざまな「問い」で溢れている。そしてきっと答えが無いから、言葉にしようとする、戸惑う、悩む、創り出す。

Q, 「サンセルフホテルとは何なのか。」 A, 「サンセルフホテルとは「問い」である。」

そんな腑に落ちない「答え」に辿りつく必要もない。「問い」からはじまる私たちの創造は止まらない。そこから何だって生み出すことができるはずだ。どうしても「答え」を求めたくなってしまうたら、生まれて間もない赤ん坊の頃の自分を想像することしよう。世界はどれだけ「問い」だらけだったことだろう。

井野

シンポジウム「サンセルフホテルとは何なのか」
開催日時：2014年2月28日(金) 19:00~21:00
パネリスト：馬場正尊／長島確／太下義之／熊倉純子
ファシリテーター：森司
アーティスト：北澤潤
主催：取手アートプロジェクト

サンセルフホテルニュース
台湾に進出!?

SUN SELF HOTEL NanJiChang

なんとこの夏、台湾でのサンセルフホテルがはじまります。舞台は50年の歴史をもつ台北初の住宅団地、「南機場団地」。南機場という地名は、日本統治時代に飛行場として使われていた歴史を示しています。独特な景観をもち、名物の夜市が賑わうこの団地で、サンセルフホテルの「太陽」は何を照らし出すのでしょうか。新着情報はウェブサイトをご覧ください。(北澤潤八雲事務所)

www.sunselfhotel.com/nanjichang/

演劇、それともコミュニティデザインなのか

サンセルフホテルとは何なのか?

参加者がそれぞれの役割を「演じている」という意味で演劇である。住民たちが新たな交流を始めるという意味で、コミュニティデザインでもある。団地をホテルへ一時的にコンバージョンしているのは、建築としても示唆的だ。サンセルフホテルはそのすべてであり、どの領域でも捉えられない。今、アートの位置づけや、それが持つメッセージも変化している。妻有や瀬戸内のように、自然や地方の風景のなかに生まれるアートもある。アートマーケットは健在で、高値で取引される作品もある。デザインや音楽と融合しながらエンタテインメントを帯びる場合もある。社会は、時代は、何をアートに求めるのか。サンセルフホテルという作品を素材にしながら、アートの現在について探求したい。

馬場正尊

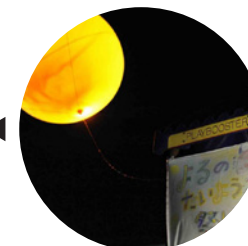
サンセルフホテル 宿泊の流れ



チェックアウト



就寝



太陽をあげる



ルームサービス



蓄電



チェックイン

地域の人がもてなして、一晩泊めて、送り出す。宿泊客になったら神様の気持ちがわかるのかな。

演劇
Panelist
長島確 ながしま・かく
ドラマトゥルク／翻訳家



「これ、お祭りだと思いました」

演劇から見た長島さんのコメントは、あるキーワードから始まった。

「これ、お祭りだと思いました。神様が年に1回やってきて、地域の人のもてなすわけ。一晩泊めて、送り出す。宿泊客になったら神様の気持ちがわかるのかな、と。」

また、演劇のほうに話を修正しますと、やってみるといつかはすごく演劇のなんです。現実には必要あってなにかをやるんだって、それはただの実生活なんだけど、やってみるのはそうじゃないわけです。」

ホテルマンたちはそれぞれ役割がある。宿泊者がやってくる「女将」として挨拶をしたり、「コック」として料理を振る舞ったり、「太陽部」と呼ばれソーラーパネルの専門家として頼られる。

「それと、お客さんもすごく協力しないといけないですよ。違う言い方をすると、やってくる人たちのほうがすごく楽しんで、充実感がものすごい。実は演劇もそういうところがあって。いきなり目の前で演じられるフ

イクションに乗っかるお客さんの努力も不可欠なんです。その双方向の努力の出会う場所として、このホテルはすごくおもしろいと思いました。」

森から、時間軸についてどう考えるか、という質問が投げかけられる。

「実際に街、外でやってますよね。バスの時間や昼夜がある。実際の生活と同じ、地球の自転、太陽の軸の公転によってできている時間の尺を、実生活とは別の、もう一つの物語に使う。実尺で使っているのは、おもしろいと思いますね。」

太陽「エネルギー」が考えさせるもの

象徴となる太陽が上げられないと成立しないこのプロジェクト。電気をため、その電気だけで生活をする。この行為から、3・11以降に意識することが多くなったエネルギーのことを考えた方も多いのではないだろうか。太下さんのコメントは、そんな目線から。

「私、このプロジェクトのことをお伺いしたときに、真っ先に思い浮かべたのは3・11なんですよ。日本の高度成長に対応するような形

で供給が進められた団地と、経済活動、産業活動が起こることで増えている電力需要に対応するための原子力。サンセルフホテルは自分たちで発電して、自分たちで太陽をつくる、というプロジェクトですね。一方で、原子力というのは実はそういうことだったんじゃないかという見方もできると思っています。」

絶対的な無用性

4人目のパネリストは取手アートプロジェクトの実施本部長・熊倉純子。サンセルフホテルの発案から実現までに携わってきた。

「北澤さんはみなさんの妄想のスイッチを入れるのが上手で。世の中に既に存在しているなんらかの役割みたいなものを、参加してくださった一般の方々が自ら発見して、それを演じることに面白味を見いだして。それを真剣にやるというタイプのアーティストなんです。」

活動の様子を見てみると、北澤さんはあくまでもホテルマンの1人として関わっている。

「これが作品なのかと言われると、どこなんだろう。つくったカーテンなのか、ランプシェードなのか。どう考えてもホテルには必要な太陽なのか。アートと言っているが絶対役に立たないものが必要なのですけど。絶対的な無用性。目的にまったく沿わないものがあると、美学的にはアートっぽくなると言われているんですが。

SUN SELF HOTEL
井野団地
ホテルマンの日々
www.sunselfhotel.com/blog/
活動の詳細は
ホテルマンのブログにて
ご紹介しています